

【自身の人生を正しく数える知恵】

聖書本文:伝道者の書1章1-14・12章13-14/暗唱聖句:詩篇90篇10節・12節 説教者:鄭南哲 牧師
(Rev.Jung nam-chul)

コロナ禍の感染拡大が続いている中、一週間も教会の信仰の家族みなさん、みんなお元気でしたか。願わくは、引き続き日々我らの子供たちの保育園や幼稚園、全学校生活、職場で、社会活動などの環境の中で引き続き守られますように切にお祈り申し上げます！

＜1.今の時代の社会と文化の特徴＞

アメリカの有名な神学者であり、ベストセラー作家でありながら、もっとも尊敬されているティモシー・ケラー(Timothy Keller)牧師が書いて「ON DEATH(死について)」の本の中には、今我らが生かされている現代の社会と文化にはいくつか特徴があることを指摘しています。たった一世紀の前の19世紀でも、死は何の予告もなく、様々な形で家族を奪っていました。女性は出産で、赤ちゃんは何らかの高熱で、そして男性は働く場所で牛や馬にひかれて、何かの機械で、また無数の病気で、人は突然死を迎える時が多かったでしょう。

しかし、過去には人々は死を身近な場所で見ることができました。家で死を迎えていたので、だいたいの人は大人になるまでに人の最期(さいご)を目撃していました。しかし、今は医学と科学が発達して、早期に死亡原因を解決したり、病院やホスピスセンターで死を迎えるので、成人になるまで誰の最期をも看取(みと)ったことがないという人が多いのです。これまでの文化では、現代人ほど死の不可避性を否定して生きることはありません。

そして、今日の社会の文化は、現世の幸福だけに集中する文化になっています。現代は、神も、魂も、霊もない。超自然的な存在も次元はなく、物質の今の現世界がすべてという価値観になっているのではないのでしょうか。人生の意味は今の幸せ、安楽、成功に向いています。

その中多くの現代の人々は深い虚しさ¹に落ちています。現代文化でセックスと恋愛、金、出世、政治と社会運動など、多くの要素の比重が過度に大きくなった現象は、現代人が死の前で神と信仰に頼らなくても、意味を引き出そうとしています。今の思想家たちは、死をそこまで悲惨だと思わないと言っています。つまり、死ぬと何もわからない、何も感じない、苦痛もない、だから死を恐れることはないと言います。しかし、人類はこの主張に同意していません。死は人間が持つ、根の深い問題だからです。

現代文化には罪と罪責感、そして赦しという概念が希薄(きはく)になっています。

現代は信仰が衰退(すいたい)しつつ、裁きの神様を信じない人が増えているため、罪意識も弱くなっています。しかし人間は、ある学者が指摘したように、絶対道徳、罪と裁き、罪意識と恥、罰という信念を捨てることはできない。それにも関わらず、今日私たちは神様と天国と地獄という既存の基本信仰を捨てて、その結果、悔い改めや恵み、赦しという大切な真理を失ってしまっているのではないのでしょうか。

牧師である私は、死を目前にした人たちとの時間をよくありましたが、だいたいの人は、死が近づいてくると、人生を振り返って強い後悔に陥っていた姿を見ました。死の前に立つと、自身への不満がずっとあらわれて、良心を沈黙させることができず、結局裁きへの恐れが強くなっていました。いくら否定しようとしても、罪意識は執拗(しつよう)で、死の前では最高潮に至ります。現代文化ではこの問題を解決することはできないが、イエスキリストによる信仰は私たちに素晴らしい光と希望を与えてくれます。その手応えとなる神の御言葉が聖書の中伝道者の書となります。

今日我々に与えられている神様からの御言葉は伝道者の書です。伝道者の書というのは“宣べ伝える、知らせる者の書”という意味です。12章で構成されているこの伝道者の書は何かこの御言葉を読む者たちに、そして我々に伝えることがある事を暗示しています。伝道者の書は何を伝えるためにこの書を記録したのでしょうか？

＜2.ソロモン王の祝福と大きな失敗の人生を通して反面教師＞

よく知られていることはソロモン王の若い時は‘雅歌書’が記録され、壮年期の時には‘箴言’が、ソロモン王の老年、人生のたそがれの時に書かれて御言葉が‘伝道者の書’であります。

伝道者の書においてソロモンは直接自分が書いたと名前が知らせてはいたのですが、**1章1節**によると「エルサレムでの王、ダビデの子、伝道者のことば。」だと書かれているので、伝道者の書の記録はソロモン王だと知られていません。

イスラエルにまだ王様がいなかった裁きつかさ時代が過ぎて、イスラエルの中で初のサウル王が立てられ、その後2代目がダビデ王でした。しかし、ダビデ王は自分の部下ウリヤの妻バテシェバからの始めて生まれた子は亡くなりましたが、二番目の息子としてソロモン生まれました。そして、サウルとダビデに引き続き、イスラエルの三代目の王となります。ソロモン王は若い21才にイスラエルの王となって40年間在任しました。

第一列王記3章によると、初期ソロモンが王になったばかりの時は神様を恐れ、神様の御心を求めました。彼が神

様を恐れかしこんでいけにえを捧げました。「**3**ソロモンは主を愛し、父ダビデの掟(おきて)に歩んでいた。ただし、彼は高き所でいけにえを献げ、香をたいていた。**4**王はいけにえを献げようとギブオンへ行った。そこが最も重要な高き所だったからである。ソロモンはその祭壇の上で千匹の全焼のささげ物を献げた。**5**ギブオンで主は夜の夢のうちにソロモンに現れた。神は仰せられた。「あなたに何を与えようか。願え。(3-5節)」

ソロモン王の礼拝と献身を喜んで下さった神様はソロモン王に“あなたに何を与えようか。願え”と言われた時、ソロモン王は自分は神の前で小さな子どもで、出入りする術(すべ)すら知らない者(列王記第一3章6)なので、イスラエルの民を神の御心に相應しく、正しく治められるようにと神の知恵を求めました。金や権力を求めず、王として、神の知恵を頂き自分に与えられていた使命と責任を最後まで果たそうとしていた姿に喜んで下さった神様は彼が求めた神の知恵だけではなく、なかった富と誉れまですべて加えて下さいました。神様はソロモン王に「**あなた**の生きているかぎり、王たちの中であなたに並ぶ者は一人もいない(第一列王記3:13)」で言われました。

それでソロモン王は人類の歴の中知恵の象徴的な存在となるほど祝福されました。**第一列王記4章30節**では「**ソロモンの知恵は、東のすべての人々の知恵と、エジプト人のすべての知恵とにまさっていた。**」そして、**第一列王記4章34節**によると、ソロモン王の知恵のうわさを聞いた王たちのもとから、あらゆる国の人々が、彼の知恵を聞くために訪ねて来るほど当時にも今日に至るまでも知恵の王として知られるようになりました。例え、エチオピアのシェバの女王がソロモンの名声を聞いて訪ねるほどでした(第二歴代誌9:1)。聖書にも知恵の人の体表的な存在として、認められ、聖書に“**ソロモンの知恵**”もしくは“**ソロモンのすべての知恵**”という表現が聖書に何度も言及されています。**(第一列王10:4, 23, 11:41, 第二歴代誌9:3, 22, 23, マタイ12:42, ルカ11:31)**箴言や伝道者の書を見ると、まさしく彼ほど歴史上賢い人物として祝福された人も少ないでしょう。

知恵だけではなく、**ソロモン王は富と名誉と栄華を極めた王となりました。「ソロモン王は、富と知恵において、地上のどの王よりもまさっていた。(第一列王記10:23, 第二歴代誌9:22)」** イエス様も「**栄華(えいが)を極めたソロモン(マタイ6:29,ルカ12:27)**」という表現をされたというのは神から彼の富と栄華と名誉がどれだけ祝福されたのかが分ります。

それだけではありません。ソロモン王の時代にはイスラエルの王国領土が一番拡大され「**あの大河(たいが)からペリシテ人の地、さらにエジプトの国境(くにざかい)に至る、すべての王国を支配した。**」(**第一列王記4章21節、第2歴代誌1章・第二歴代誌9章26節**)。イスラエルの一番の全盛期と平安な時代を迎えました。そして、国力(こくりょく)を高めました。軍隊を養成し、軍費(ぐんぴ)を蓄え、最高の軍事力を保っていた時代(騎兵のための領地建設(第一列王記9章18-19)、戦車1400台、騎兵は12000人(列王記10章26節)、馬屋が四千箇所以上(第二歴代9章25節)ともなりました。**彼はこのような政治的な能力だけではなく、詩と文学、芸術、動植物学科など自然にも詳しく人物でした(第一列王記4章33節)。**

ソロモン王が今までなかった一番の業績は神に礼拝を捧げられる神の聖殿を初めて建てることに用いられました(*建築年数7年間・働いた労働者数:約3万人ほど、山で聖殿に使う石と岩を切る人だけ8万人、運ぶのに7万人が動員*聖殿に使う最高級レバノンにの杉材の木を切るために毎日1万人ずつ派遣する(第一列王記5-6章、7:15-51)ところが、全てが祝福され、物事がうまく行く時、ソロモン王は神を背き、神から離れ始めます。**国が豊かになり、平穏になって安定してくると、彼の生き方は神から離れ、墮落に陥いてしまいます。**結局、神から与えられたすべての富と権力、王の立場を利用し自分の本能の欲する通り止めず、快樂の道具となってしまいます。**伝道者の書2章10節の中「自分の目の欲(ほっ)するものは何でも拒まず、心のおもむくままに、あらゆることを楽しんだ。」**と書かれています。ソロモン王が自分で告白するように「私はまた、**自分のために銀や金、それに王たちの宝や諸州(しょしゅう)の宝も集めた。男女の歌い手を得、人の子らの快樂である、多くのそばめを手に入れた。(伝道者の書2章8節)**

ソロモン王は自分の妻に満足せず、**およそ一千人ほどの女性を自分のそばに置かせました(列王記第一11章1~3節**「**1**ソロモン王は、ファラオの娘のほかにも多くの異国人の女、すなわちモアブ人の女、アモン人の女、エドム人の女、シドン人の女、ヒッタイト人の女を愛した。**2**この女たちは、主がかつてイスラエル人に、「あなたがたは彼らの中にはいってはならない。彼らをあなたがたの中に入れてもならない。さもないと、彼らは必ずあなたがたの心を転(てん)じて彼らの神々に従わせる」と言われた、その国々の者であった。しかし、ソロモンは彼女たちを愛して離れなかった。**3**彼には、**七百人の王妃としての妻と、三百人のそばめがいた。その妻たちが彼の心を転(てん)じた。」**)

それだけではなく、**創造主の神以外の異邦の偶像の神々を拜んでいた女たちを自分のそばめとして受け入れると、何とソロモン王自分さえもさっそく影響され、偶像崇拜に陥り、アシュタロテを拜み、ミルコムとモレックにも拜んで、グモスの神まで全部拜んでしまいます。(列王記第一11章5-7節**「**ソロモンは、シドン人の女神アシュタロテと、アモン人のあの忌(い)むべきミルコムに従った。6**こうしてソロモンは、**主の目に悪であることを行な**

い、父ダビデのように、主に従い通さなかった。7当時、ソロモンは、モアブの忌むべきケモシュのために、エルサレムの東にある山の上に高き所を築いた。アモン人の、忌むべきモレクのためにも、そうした。」

結局、神を離れ、全ての世の楽しみと快樂を体験した結果、神の厳しい怒りを受けるしかなくなりました。

「主はソロモンに怒りを発せられた。それは彼の心がイスラエルの神、主から離れたからである。このことについて、ほかの神々に従って行ってはならないと命じておられたのに、彼は主の命令を守らなかったからである。(列王記第一11章8-9節)」

そういうわけで、ソロモン王は老後、神の前で全ての人生の歩みを振り返りながら、経験した彼の告白はこうでした。「私は、日の下で行なわれるすべてのわざを見たが、見よ、すべてが空しく、風を追うようなものだ。(伝道者の書1章14節)」彼は老年になって、ようやく今までの人生の歩みと生き方を振り返りながら、神の御前で懺悔(ざんげ)しながら、神様の御前でまことの人生の意味を問いかけています。我々の人生はどこから来てどこに向かっていくのか。日の下で一度だけのこの人生をどうやって生きるべきなのか。彼が神に最も祝福された者でありながら、後一人の大きな失敗の経験者として、これから神の前でふさわしく人生を歩もうとしている人々にメッセージを投げている、これがまさに伝道者の書なのです。

<3.伝道者の書のテーマ：だから日の下ではなく、日の上(創造主の神)を見上げなさい!>

伝道者の書はどうやって始まっていますか。伝道者の書1章2節に、「空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。」英語の聖書では「空」という意味を「Meaningless」で訳しましたが、これが5回も繰り返されています。空の意味は「息を吹き掛ける」(例え、寒い時、手に息をふきかけると、しばらくその息が白く目に見えますが、すぐ消えて見えなくなってしまうように、世のすべてが一瞬のもので、すぐ消え去る一瞬のものであるため、むなししいという言葉が使われたのです。そういうわけで伝道者の書でこの単語は頻繁に出ているのです。)という意味です。「日の下でのすべてがむなししい(Everything is meaningless)」という意味です。

この伝道者の書の結論になる、12章8節でも今までの人生の中でやった事をすべて述べてから結論的にもう一度繰り返されています。「空の空。伝道者は言う。すべては空。」

伝道者の書のカギになる一番よく出てくる単語が二つありますが、原語聖書で調べると「空(meaningless)、むなししい(vanity)」という言葉を含めて34回「日の下で」という言葉が31回も出ています。

日の下でいつまで続くのではなく、限られている時間と空間のもとでのしばらくの人生の旅路である意味が含まれています。神様なしに日の下で色々なことに手出して人生の真の目的と満足を探そうと努力してもむなししいし、意味がなかったということを伝道者の書は語っています。

そういうわけで伝道者の書によると、日の下で人間の知恵もむなししい(伝道書1章12-18節)、快樂もむなししい(伝道書2章1-11節)、富もむなししい(伝道書2章12-23節)、人間のすべての努力もむなししい(伝道書2章24節-3章15節)ということ語っています。4章から11章まではすべてがむなししいという主題をさらに拡大し詳しく説明する内容が書かれています。

しかし、愛するクリスチャン信仰の家族のみなさん！決して誤解(ごかい)してはいけません。この伝道者の書のメッセージは虚無主義(ニヒリズム(nihilism))や悲観主義(人生は何の生きる意味もなく、人生はどうでも良い)と主張しているのでは決してありません！

伝道者の書で、神はソロモン王を通して、日の下のすべてがむなししいからこそ、方向を変えて日の上の真の神様を見上げる時、人生のまことの望み、真の救いが与えられる！ですから、神を信じ頼り、神を見上げる時こそ、神から許された一度の人生をどう生きるべきなのかその真の答えが見いだされると教えて下さっています。

<4.伝道者の書の結論のメッセージ>

伝道者の書を結論的にまとめたところが今日の本文の13-14節です。「13結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。14神は、善であれ悪であれ、あらゆる隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからである。」

「結局のところ、もうすべてが聞かれていることだ。」‘言うべきことすべて言ったはずなのだ。だから結論はこれだ!’と読む我らに教えて下さっています。12章1節の「あなたの若い日(まだ生ける力があるうちに)に、あなたの創造者を覚えよ。」というメッセージで結論を出して終わっていますが、まとめて、3つのポイントでまとめて見る事ができます。

①神様なしの日の下での人生の結末は空しくなるのみである

どんなにたくの権力と名誉、快樂、お金を所有し、世の欲しがるすべてのものを手に入れたとしても、神様と関係なく、神から離れ、神様のいない人生の結局は、むなししく終わるしかないのが人の人生であることを明確に教えて下さっています。これが、人をお造りになり、命を与え、すべての人に一度の人生を許して下さった神様がソロモ

ン王を通して我らに悟らせて下さっている真理であります。

②真の神様を知り、神様を信じ、神様を愛して、その命令を守り行うことである

(1 3節「結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。」)結局、伝道者の書を通して、人が追い求めるべき人生の最善の道が何であるかをよく教えて下さっています。伝道者はこれがまさに人間の持つべき務(つと)めであると教えて下さっています。すでに神様はソロモンを通して箴言1章7節「主を恐れることは、知識の初め。愚かな者は知恵と訓戒をさげすむ。」、箴言9章10節で、「主を恐れることは知恵の初め、聖なる方を知ることは悟ることである。」と教えて下さいました。人生のまことの知恵は神様を知り、信じることから始まります。創造主神様のみ真の神の救いと永遠のいのちと祝福の源であるからです。人間は本来真の神様を信じ、その真の神と交わりながら生きようと造られた存在です。

③神様は人間のすべての行いをご存知で必ず報われ裁かれる

(1 2:1 4節「神は、善であれ悪であれ、あらゆる隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからである。」)これが伝道者の書の最後のメッセージです。

神様は我々の考えていること、心のすべてのはかりごとやすべての行い、他の人の知らない隠密(おんみつ)なことさえもすべてご存じであり、正しく報われ、裁かれるお方であることを教えて下さっています。ですから、人の人生とは生きている時が決してすべてではない事を暗示して下さいます。かならず、神が許して下さいましたこの一度の人生の旅路の時を終わった時には、だれであってもかならず、神の御前にお立ちになり、人生のすべての行われたことに対し、精算をされ、報われる時が待っている事を教えて下さっています。

愛する信仰の家族のみなさん！我々の生涯では2度もなく、練習はありません。通って来た我々の人生の旅路を消すこともできません。神様の報いは平等です。神様の報いは正確で、正しく行われます。その神の前で人生を正しく数えて見ながら、今与えられている人生を神の御前で感謝しつつ、正しく歩むみなさんとなりますように切にお祈り申し上げます。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！だからこそ、今生かされて我々の一度の人生がどれだけ神様の御前で大切なのか逆説に教えて下さっているのではないのでしょうか。

だから、まだまだ自分の人生はこの地上でまったく問題がないと、永遠に長続くのだと勘違いしてはならないのだと教えて下さっています。

我々の人生が長いように感じる時もありますが、人生を振り返ってみると、どんな早いのものなのか分かりません。詩篇90篇4節に「まことに、あなたの目には、千年も昨日のように過ぎ去り、夜回(よまわ)りのひと時ほどです。」詩篇90篇10節では人生についてこのように表しています。「私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。そのほとんどは、労苦とわずわい(苦しみ)です。瞬(またた)く間に時は過ぎ、私たちは飛び去ります。12どうか教えて下さい。自分の日を数えることを。そうして私たちに知恵の心をえさせてください。」

詩編90篇12節には「自分の日を数えること」は、「知恵」を得るためだと教えて下さっています。

今日の伝道者の書の結論は、かつてソロモン王の父であったダビデの告白と似てるような内容だと感じさせられます。詩篇39篇4-6節です。「主よ。お知らせください。私の終わり、私の齢がどれだけなのか。私がいかにはかないかを知ることができるように。5ご覧ください。あなたは私の日数を手幅(てはば)ほどにされました。あなたの御前では私の一生はないも同然(どうぜん)です。人はみなしっかり立ってはいても実に空しいかぎりです。6まことに、人は幻のように歩き回り、まことにむなしく立ち騒(さわ)ぎます。人は、蓄(たくわ)えるが、だれのものになるのか知りません。」そして、結論的人生の答えはこうでした。

「主よ。今、私は何を待ち望みましょう。私の望み、それはあなたです。(詩篇39篇7節)」

伝道者の書は人生の結局、ソロモン王の生涯を通して、人間のなやむべきすべての疑問と絶望と試して見るすべてが書かれています。ソロモンは人生の末に人生における飢え渴きとむなしさの中で、人生の真の意味と人が残りのこれからの人生をどう生きるのか問いかける神様の御言葉です。

ソロモン王は死ぬ直前、悔い改め、もう一度神様を見上げます。そして、この伝道者の書を読んでいるすべての者たちがぐれぐれも自分のような生き方は繰り返さないようにと反面教師(はんめんきょうし)として証しとし、語っています。そして、われわれにこう伝えてきます。「今日からもう一度神を見上げて、新たに神に立ち返って生けるチャンス、その機会がまだ神はあなたに許して下さいます。」

今日この伝道者の書に招待された我々はしばらく何一つ隠すことの出来ない神の御前で今までの人生の歩みと生き方を振り返って見て下さい。神様の御前で私は今まで何を求めるために、何のために必死に生きて来たのか。いったい自分はどこへ向かって頑張って走り続けているのか。

今日我々を招いて下さった伝道者の書を通して、今この時点でもう一度目を上げて、神様と関係を立て直し、心を創造主なる神様に向かって謙遜に神を心から恐れかしこみ、愛し、その御言葉に信じ従いながら、歩むことができますように切にお祈りいたします。今日も主にあって自分に与えられている人生の真の人生意味と目的を神の御言葉を通して示され、悟られ、神の豊かな恵みと知恵を蓄え、主と共に進み行くクリスチャンプレイズチャーチの家族となりますよう主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン!